

日本の特産作物の立ち位置

国立大学法人 岩手大学農学部

附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センター教授 星野 次汪

地球の温暖化や化石エネルギーの枯渇、水不足などの環境劣化が喧伝されて久しい。最近、持続可能な社会にとって不可欠な環境とエネルギー問題が実感できるまでに顕在化してきた。このような中でも、急速に進化するIT革命やグローバル化による世界規模での高い成長を続け、日本は輸出産業に支えられた物質的な豊かさを享受し、輸入農産物に依拠した飽食を謳歌している。その一方で、40年前に70%を超えていた日本の食糧自給率が現在では40%まで低下し、日本の食料や農業は国際社会と密接不可分な関係にあることは論をまたない。めまぐるしく世界情勢が変化する今、農産物輸出国では自国の環境に大きな負荷を与えてまでの農産物輸出の是非が俎上にのぼりはじめている。輸入農産物の残留農薬や輸入食品の毒物混入、食品表示偽装が頻発し、海外に依存している日本の食料事情の危うさが露呈し、国民の食への関心が高まっている。

このような背景を踏まえ、日本の食糧自給率を50%にまで向上させるため、耕作放棄地の活用、輸入農産物にはない付加価値の高い作物品種の育成、高バイオマス生産イネの開発、安定多収省力生産技術の確立などの取り組みが展開されている。しかし、地域の特徴を有し限定された地域で生産される雑豆、雑穀、油糧作物、伝統野菜、工芸作物、薬用植物などの特産作物は、土地利用型主要農産物とは異なり、中山間地で高齢者によって担われることが多く、地域の伝統祭事や食文化と密接な関係にあることが少なくない。そして、個性豊かで、きめ細やかな栽培管理を必要とし、大規模機械化栽培に適さない作物も多い。そのため、収益性が高いとは言えず、輸入産物で代替され、その作物がもつモノとしての価値以上の価値が忘れ去られてきたと言える。例えば、ハトムギやヒエは畑でも湛水条件でも栽培が可能で、水田転作作物として地域農業に貢献している事例があり、また、薬理効果や健康増進作用を有すること

でも知られている。

しかし、特産作物の中には、北海道立中央農試が取り組んでいるアズキ、インゲンマメのように各4000点に及ぶ遺伝資源収集、評価、さらに品種改良、配付までの体制が整備されている作物もあれば、ハトムギ、ナタネ、ソバ、ゴマのような農研機構によって品種改良が進められている作物、ヒエのように品種改良が開始されて数年の作物、在来品種の収集、利用の段階にある作物、あるいは、まったく研究的取り組みがなされていない作物まで多岐にわたる。品種改良が不十分な作物では、倒伏しやすく、脱粒性があり、収量性の低い在来種を用いて生産されることが多い。また、マーケットが小さいことから、登録農薬もほとんどなく、市販機の転用にも限界があり、手作業に負うところが大きい。このことを不利と捉えるのではなく、中山間の高齢者が多様な生産を担い、食の安心を求める消費者に応えることが出来る有利な作物と捉える胆力が求められる。

これら特産作物には健康機能性などが期待され、国民の高いニーズがあるのも事実である。また、特産作物の品質・成分研究には未着手の部分が多いことから、今後の研究によって新たな価値が発見できる可能性もある。そのためには、これまで高齢者が担ってきた在来品種や伝統的栽培技術への想いを尊重しつつ、生産性を向上させる方策として、農業特性を改良し、機械収穫が可能な作物に仕上げることを望まれる。消費者にとっては、食の多様化を彩る一つの食材であると同時に、心を満たす食材でもある。

生産者の想いが消費者に届き、消費者の感謝の念が生産者に届くような双方向の交流による地域に根ざした特産作物の振興を図らなければならない。日本の食を巡る様々な課題を抱えている現在、特産作物の再評価が進み、生産性および品質向上に資する種苗から生産技術、産地情報までの情報誌である本誌に期待するところが大きい。